平和統一 NEWS

ＦＰＵ 兵庫
機　関　紙
第１１４号

Ｆ　Ｐ　Ｕ　兵庫
〒650-0022 兵庫県神戸市中央区元町通 7-1-2
ネオアージュ神戸元町 1001 号
TEL. 078-360-0757　FAX. 078-367-4323
HP： http://fpuhg.main.jp / E-mail:hyougo-2017@fpuhg.main.jp

発行 FPU 兵庫
発行人 文 聖 純
2018年2月1日

２０１８年１月２８日(日)大阪の昭和町で第４地区韓国婦人特別集会が開催されました。

新しい地区体制になり、初めて関西の韓国婦人たちが集い、徳野英治会長のメッセージと、金満辰地区長のメッセージと共に、久しぶりに会った韓国婦人達がおいしい料理を食べながら和気あいあいとした時間を過ごしました。

２０１８年１月１５日（月）在日本大韓民国民団兵庫県地方本部の新年会がエスタシオン神戸で開催されました。

民団と在日商工会議所との共同主催で、李圭燮兵庫県地方本部団長は挨拶として「本国においては昨年、新しい文在寅大統領が就任されました。私達は本国の安定した経済を祈って北朝鮮問題もあるので、アメリカと日本とよく協力関係を持ちながら成して行くように願い、２月に開催される平昌オリンピックの成功と共に韓半島の平和統一の為に努力しようとしています。韓日間の歴史問題、慰安婦問題などがあるが、各国別の事情があるので、お互いに約束した内容は、よく守りながら友好的な関係を結んで進むことを希望します」と新年の挨拶をされました。呉公太中央本部団長も書面で新年の辞として「韓国籍同胞が中心である民団の基本は変わりませんが、在日同胞の大統合を視野に入れた時、韓半島にルーツを持つ日本国籍同胞や新定住者など広範囲に結集する必要に迫られています。一致団結した民団の求心力でこれからの 100 年後を見据えた民団を作っていきましょう」と述べられました。その他、朱哲完駐神戸総領事の祝辞などがあり、日本の国会議員や自治体関係者などの多数の参加のもとで、WONWOOの楽しい公演があり、意義深い新年会でありました。

「頭翼思想」提唱者・FPU 創始者『文鮮明』総裁の

«««««««««««««««««『平和統一メッセージ』»»»»»»»»»»»»»»»»»

四大国家を中心とした復帰摂理の完結

エバはカインとアベルに伝統的精神を継承させたのちに、アダムに帰らなければなりません。同じように、日本はアメリカとドイツを教育してから韓国の地に帰らなければなりません。それを成しとげられなければ絶対に帰ることはできません。日本はエバ国家なのでソ連と中共が機会をうかがって攻撃すればとんでもないことになるのです。このような観点から見れば韓国の包囲問題は日本の運命を左右する問題です。摂理的観点でそのように結論づけることができます。それゆえ、韓国と日本を結ぶトンネルを早く掘らなければなりません。日本の一億二千万の人口を総動員してでもこのことをしなければなりません。

我々はこのような重大な時期に入ってきています。今が、先生が立っている復帰摂理において最後の終着点です。歴史的な蕩減条件として韓国・日本・アメリカ・ドイツなど四大国家を1つにまとめて祭壇に上げておき、神様の前に祭祀を捧げる歴史的にこれが最初で最後です。 これを勝利すれば天国が出発します。既にアメリカではレバレンドムーンを支持する運動が起こっています。南米は完全にレバレンドムーンを歓迎しています。アフリカも既にそうです。アジアもそうですがアメリカにいる日本人も「レバレンドムーン、レバレンドムーン」と言います。東洋人は気分がよくて［文先生、文先生」と言います。中国人もそうです。反対される少数者が一つになったので、今までの多数者は少数者になってしまいます。我々は数十年の迫害に対する怨恨を解くため、怨讐に報いることに精力をすべて消耗するのではなく、敵を救う為に全体を消耗しなければなりません。これは神様の愛を中心とした素晴らしい思想です。我々はこのような思想によって一つになっていく決意をすべき時点にいます。

これを成し遂げれば、ここで完全蕩減を成し遂げることができます。完全蕩減は完全復帰に通じます。完全復帰は何に通じるのでしょうか。完全完成に通じるのです。きょうのみ言の題目は！「全体蕩減」です。この全体蕩減は、全体復帰完成を目標としています。四大国家を蕩減復帰すれば、神様によいものはすべて捧げることができます。よいものはすべてこの四カ国がもっています。韓国は偉大な精神と思想をもっており、日本は美しさをもっており、アメリカには強力な力があり、ドイツには精巧な頭脳と技術があります。世界をすべて統合しても余りあるものをもっています。全体的に見れば、そこにはさまざまなものが入っています。人に見立てれば各様、各色の女性と男性がいます。それゆえ、個人、家庭、氏族、民族、国家的な蕩減基準まで立てた基台の上で、このような世界蕩減基準を立てて、新しい天国の伝統的出発点を築けば、そこから地上天国が出発するようになります。このように、歴史的に怨讐国家である四カ国が集まって、その真ん中に神の国の伝統的中心点を立てて出発します。このようになれば、地上天国は遠くありません。地上天国はすぐ近くに近づいてきたということが、はっきりと分かりましたね。

392

2018年1月28日（日）兵庫県慶尚南道道民会が三ノ宮の第一櫻で開催されました。

李相哲会長は挨拶で、昨年は「朝鮮通信使」がユネスコ世界記憶遺産に登録されるという朗報があり、両国の民間団体が協力し合い、精力的に活動を推進して、人や文化の交流を通じて、草の根の懸け橋として活動していきたいと述べられました。この日は、井戸敏三兵庫県知事も参加され、「未来への扉を開きましょう。兵庫県150周年、この大きな節目を新しい兵庫づくりへの転換点にしたいと思い故郷を愛する県民の皆様と共に新しい地域づくりと韓国の平昌冬季オリンピックが成功することを願う」との祝辞がありました。朱哲完神戸総領事も慶尚南道と兵庫県をつなぐ重要な役割を担って頂いており、観光や教育、スポーツなど、韓日関係の発展と未来志向の「韓日パートナーシップの構築を目指して努力しましょう」との祝辞がありました。

今回は特に前神戸総領事だった李成権氏と、前韓国慶尚南道知事の金斗官国会議員が参加されました。各界の日本人も数多く参加された中、おいしい食事と共に韓ウギョンさんの歌と特別公演として、加古川氷丘中学校国際交流部のサムルノリ公演があり、最後は楽しい抽選会がありました。

2018年1月２０日(土)神戸学生青年センターで「安倍政権の過去、現在、未来」セミナーがありました。

高作正博関西大学法学部教授の講演で、日本の参議院議員選挙「合区」解消、高等教育を含む「教育無償化」参議院議員憲法審査会での議論（2017年12月6日）に関する各政党の見解、武器輸出三原則の策定と骨抜きで防衛装備、防衛力の強化などについて現在、なされている行方と経済界の意向などと幅広い専門的セミナーでした。

ＦＰＵ兵庫 会長代行 文聖純

듣고 보니 이웃 孔子

홍일식
전고려대학교 총장.
선학평화상 위원장

소가 풀을 먹고 자라지만 그 고기가 식물성이 아닌 것처럼 우리가 일찍부터 중국 문화의 영향을 많이 받아 왔지만 우리 문화는 결코 중국의 그것과 같지 않다 。흔히 문화적으로 우리를 포함한 아시아 대륙 전체를 중국 문화권, 또는 유교 (儒教) 문화권이라하여 그 동질성을 강조하지만, 꼭 그렇게만 보아서는 안된다. 가령, 우리 나라 사람이 부모나 조상의 제사를 지내는 것만 보더라도 거기에 우리 나름의 특성이 있다. 비록 겉으론 그 제사를 지내는 의식과 절차가"주자 가례(朱子家禮) "에 따른 유교식이긴하지만, 실제로 제사를 지내는 사람의 심층 심리는 중국인의 그것과 전혀 다르다. 유교에서는 제 (祭)를 일컬어 '제즉진미진지효 (祭則盡未盡之孝) 라하여 부모 생전에 다하지 못한 효(孝)를 다하는 것으로만 이해한다 . 따라서 그들에게는 제사란 어디 까지나 생활 규범의 일종이요, 그 연장된 행위인 것이다. 그러나 우리 한국인에게 있어서는 좀 다르다. 좀 다른 것이 아니라 사실은 전혀 다르다. 즉 대부분의 한국인에게는 돌아가신 부모의 영혼이 어디엔가에 있어서 항상 나의 일거수 일투족을 굽어 살펴보고 있으며, 또한 나의 생활의 길흉화복 (吉凶禍福)을 직접 주관하는 신격으로 인식된다. 그러기에 부모의 제사를 정성껏 잘 지내면 부을 받고 그렇지 못하면 화 (禍)를　입는다는 일종의 신앙적 형태를 띠고 있는 것이다.

聞いてみたら隣りの孔子

洪 一植
前 高麗大学校 総長
鮮鶴平和賞の選考委員長

牛は草を食べて育っても、その肉が植物性にはならないように、私たちが早くから中国文化の影響をたくさん受けて来たが、我が文化は決して中国の文化そのものではない 。文化的に私たち韓国を含んだアジア大陸全体を中国文化圏、または儒教文化圏だと言ってその同質性を強調するが、そのように見てはいけない。たとえば、韓国の人々が、親や先祖の祭祀を執り行なうことだけを見ても、そこには、私たちだけの特性がある。表面的には、その祭祀を執り行なう儀式と手続きが朱子家礼による儒教式ではあるものの、実際に祭祀を執り行なう人の深層心理は中国人のそれとは全然違う。儒教では祭祀、祭則盡未盡之孝として、親が生きている間に孝をつくすことができなかったので、今、祭祀によって親孝行をする。だから、彼らには祭祀と言うのはどこまでも生活の一部であり、日常の行為であることだ。 しかし、韓国人においては、ちょっと違う。いや、ちょっとではなく事実は全然違う。 すなわち大部分の韓国人には、亡くなられた親の魂がどこかにいらっしゃって、私達の一挙手一投足をみまもっているし、また、私達の生活の吉凶禍福を直接主観する神格と認識されている。それで、親の祭祀を熱心にすれば富を受け、怠ると災いを受けるという一種の信仰的な意味合いを持っている。

따라서 제사 음식도 (적어도 관념적으로는) 신 (神)이 직접 내려와서 잡수신다고 생각한다.그래서 옛날부터 민간에 이런 얘기가 전해오고 있다. 어느 고을 양반이 우연히 상놈의 집 제사 지내는 것을 보게 되었는데 , 무슨 음식인지 김이 무럭 무럭 나는 음식을 제상 (祭床) 밑에다 놓고 절을 하더라는 것이다. 하도 이상하여 제사가 끝난 뒤에 그 주인에게 묻기를 그 상 밑에 놓고 지낸 음식은 대체 무엇이냐고 했다.
그랬더니 그 상놈이 대단히 계면찍어 하면서 말하기를, "다름 아니오라 아까 상 밑에 놓고 지낸 음식은 개고기 였사온데 저의 아버님은 생전에 개고기를 무척 즐겨했읍니다. 이제 돌아가셨다고는 하나 입맛이 변했을 리야 있읍니까? 그러나 제 아무리 상것이지만 제사 음식에게 고기를 쓴다는 말은 못들었다고 하여 생각 다 못해 제상 (祭床) 밑에 놓고 지낸 것입니다. 귀신이야 상위에 있으나 상 밑에 있으나 잡수셨을게 아닙니까?"상놈의 이 말을 들은 양반이 비로소 무릎을 탁 치면서"옛말에도 예출어정 (禮出於情) 이라하여 사람의 예의는 정으로부터 나온다 했으니 너의 그 제례야말로 참된 예절이로다"하며 감탄해 마지 않았다고 했다. 그 양반이 또 다른 고을에 들렀을 때 어느 상놈의 집 제사 지내는 것을 다시보게 되었다. 이번에는 온 가족이 제상 앞에 늘어 서서 초저녁부터 계속 절을 하는데, 한밤중 제사가 파할 때까지 자꾸만 절을 하더라는 것이다. 양반이 생각하기를, 일반 기제사 (忌祭祀)의 경우 모든 제관이 다같이 절을 하는 것은 두 번으로 족한 법이고, 이것이 일반 가례 (家禮)인데 무슨 절을 저처럼 한없이 한단 말인가 싶어 제사가 파하기를 기다려 주인에게 그 까닭을 물어 보았다 .

したがって、祭祀の食べ物は（観念的には）神仏が直接降りて来て召し上がると考えている。それで昔から、民間には、こんな話が伝わっている。ある村の両班が偶然に、庶民が祭祀を行うのを見かけたが、何の食べ物なのか湯気が立ち込める食べ物を祭壇の下において、お辞儀をしていた。あまりにも変で祭祀が終わった後に、その主人に聞くと、その祭壇の下に置いた食べ物は一体何なのかと聞いた。するとその庶民がすごく恥ずかしそうに言うには、「他ではありません。先ほど祭壇の下に供えた食べ物は狗(犬)肉なのです。私のお父さんは、生前に狗肉をたいそう好んで食べていました。たとえ亡くなられたとしても、好みは変わっていないのではないでしょうか?しかし、庶民であっても、祭祀の食べ物に狗肉を供えたという話は聞いたことがないので、祭壇の下に供えました。神仏は祭壇の上にあっても下にあってこだわらずに召し上がられたのではありませんか?」常民の言葉を聞いた両班が、膝打ちしながら「古語にも礼は情より出ず（礼出於情）といって、人の礼儀は情からくるといえるが、お前のその祭礼こそ真の礼節だ」と感動したのである。その両班がまた他の村に立ち寄った時、ある庶民の家の祭祀を行う所をまた見る機会があった。今度は家族全員が祭壇の前に並んで、宵の口から真夜中までの間、祭祀が終わるまでしきりにお辞儀をしていたと言うのだ。 両班が思うのに、 一般の忌祭祀の場合、すべての家族がいっしょにお辞儀をするのは二度することが一般家礼（家礼)なのに、どうして限りなくお辞儀をしているのか聞きたくて、祭祀が終わるまで待って、主人にそのわけを聞いてみた。

그랬더니 그 주인이 대답하기를 、"양반님 네야 유식 하니까 귀신이 언제 왔다가 언제 가는지 알아서 그 시간을 맞추어 절을 하시면 되지만, 저희 같은 상놈이야 무식하니 귀신이 정말 언제 왔다가 언제 가는지 알 수가 있읍니까? 그래서 이처럼 초저녁부터 밤새도록 절을 하는 것입니다. 이렇게하면 그 중에 한번 쯤은 틀림없이 우리 아버지가 저희들의 절을 받으셨을 것이 아닙니까? 이 말을 들은 양반이 더욱 감동이 되어 스스로 탄식하기를, 옛말에 정출어근 (情出於近) 이라 하여 사람의 정(情) 은 가까운데서 부터 나온다 했으니 네 행위가 정녕 숨김없는 인정에서 나온 것이구나, 성인(聖人)이 어찌 따로 있겠느냐. 속담에 이웃 공자몰라 본다는말이 정녕 거짓이 아니로다!"하며 형식에만 얽매여 생활하는 자신을 몹시 부끄러워 했다 . 이로 보면 옛날이나 지금이나 우리 민주 문화 창조의 진정한 주제는 언제나 서민 대중이었다. 소수 지식인 귀족들은 흔히 외래 문화에 물들어 자기 것을 부정하고 업신 여기는 타성이 있기 마련이다. 오늘의 지식인에게도 이런 경향은 없는지 우리 스스로 한번 쯤 되돌아 볼 일이다.

(1983, " 한국인 ")

するとその主人が答えるには、「両班様は有識者だから神仏がいつ来られていつ帰られるかを知って、その時間に合わせてお辞儀をすれば良いが、うちのような庶民は無知なので、神仏がいつ来られていつ帰られるか分かるはずがないんじゃないですか？ それで、このように宵の口からひと晩中お辞儀をしているのです。このようにすれば、その内の一度くらいは間違い無く、うちの父が私たちの拝礼を受けて下さっているのではないですか？ 」この言葉を聞いた両班が、さらに感動して自ら歎息するのを、古語に、情出於近といって人の情は、心から出てくると言った。あなたの行為がすなわち、本心から出たことだね。聖人がどうして別に居るものか。「隣りに居る孔子を知らず」のことわざが、その通りだ！ 形式だけにこだわって生活する自分をとても恥ずかしく思った。これを見れば、昔も今も私たち民主文化創造の真正な主人公は、いつも庶民大衆だった。少数知識人や貴族たちはよく外来文化に染まって自分のものを否定して馬鹿にする惰性があるものだ。今日の知識人にもこんな傾向はないのか私たち自ら一度くらい返り見る事だ。

（1983, 『韓国人』）

歌集　人工島

韓国　横井　傘二

会社の慰安旅行（海外編）

韓国に残る歴史の耳塚に太閤秀吉醜き猿よ
釜山来て我は知りたる益荒男の
海を睨みし李舜臣を

朝鮮と苛めに合いし同級の
女生徒の目元寂しき

韓流のホジュンのドラマ見終わりて
真摯ならざる我を悔やみし

チャングムの宮廷料理は旨かれど
その時食べしホテルは不味し

韓国の民族衣装は美しきチョゴリと
チマに優美さありて

空港を降りて匂いしニンニクの
我も好みしキムチ料理は

大戦後二つに割れし朝鮮の悲劇を知るか
我は日本人

＊この歌集は自叙伝的な要素を持つ歌集です。正直な気持ちを、できる限りその時その場所において、短歌にしたものです。最後まで読んでいただければ、幸甚に存じます。

交流の広場

韓国民話　狐の転生１

阪神支部 支部長 尾道 宗継

済州道西帰浦にパク・ピョンという人が住んでいた。義侠心が強く武術も優れたソンビ（学識はあるが官職に就かない人）で寺小屋で多くの学童たちを教え生計を立てていた。ある日の夕方、狩に出かけての帰り、林の中で一匹の狐が古い墓を掘り返している光景に出くわした。毛が雪のように白い狐だった。パク・ピョンは好奇心に駆られ、木の陰に身を隠して狐の様子を見守っていた。狐は前足と口で墓に穴を開けて、その中から骸骨を取り出し、砥石で磨き始めた。そして骸骨を頭にかぶりピョンピョンと宙返りをしたかと思うと、あっという間に美しい女人に化けたではないか。実に奇妙なことだった。パク・ピョンはとても驚いたが、早鐘のように打つ胸を静めて刀のつばを握り締めた。「邪悪な獣を一刀の下に斬捨てよう！」ところが、心の中で叫んでいるだけで、妖しく心を惹く女人の姿態を見た瞬間とても刀を抜く勇気が出ず、迷っている間に女人は墓場を脱け出して村の方に歩いていった。パク・ピョンは磁石にひかれるかのように女人の後ろについていった。女人は村の入り口の水車小屋の前に着くと、歩みを止めて注意深く周りを見回した。「あの妖怪がいったい何を狙ってこの村に来たのだろうか？」パク・ピョンは伊吹の陰に体を隠して逸る心を抑えていた。　しばらくすると村の方から書籍を抱えた若者が現れた。すると、女人は飛び出して行き、若者に抱きついたかと思うとその手を掴んで小屋の中に入っていった。パク・ピョンは仰天した。その若者は李進士家の三代続いた一人息子で自分の寺子屋に勉強に来ている学生だったのだ。パク・ピョンは刀を抜いて水車小屋に近づき中を覗いた。

女人は豊満な胸をむき出したまま若者を抱いて口付けをしていた。若者は今にも息が切れてしまうかのように喘ぎながら、女人が口を合わせて舌から転がして入れてくれた玉を口の中で転がして、また女人の口に入れているではないか！パク・ピョンははっと我に返った。狐が若者の精気を吸い込んでいるのに違いなかった。そうでなくても、この頃、その若者が青ざめた顔をして弱々しく痩せていくようで心配していたのだが、それはすべて狐に憑かれたせいだったのだ。そうと知った以上、見ぬ振りしてほっておく訳にはいかなかった。パク・ピョンはパッと勢いよく戸を蹴って小屋の中に入り、逃げる暇を与えず女人の首に刀を当てた。若者は魂が抜けたような朦朧とした瞳でパク・ピョンを眺めていた、女人は真っ青になってブルブル震えていた。

「お腹に子供が……。どうぞお情けを……」

女人は哀願したが、パク・ピョンは頑として応じなかった。

「邪悪な獣が小細工をして人間をたぶらかすとは……、許すわけにはいかない！」

パク・ピョンの刀は風を切って振り下ろされた。凄絶な悲鳴と共に倒れた女人は血走った目でパク・ピョンを睨みつけながら歯軋りをした。

「死んでもこの復讐はせずにはおくものか……！」

女人は徐々に狐の姿に変わりながら悲痛な鳴き声と共に息を引き取った。パク・ピョンが死んだ狐の腹を切裂いてみると狐は子を孕んでいた。パク・ピョンは狐の皮を剥いで首巻を作り夫人への贈り物にした。その日から百日後に夫人は娘を産んだ。生まれた子供は健康だったが、母親は出産の苦痛に耐えられず気を失ったまま息を引き取った。妻をとても愛していたパク・ピョンの悲しみは大きかった。彼は寺小屋の門を閉めて蟄居し、一時は世間の人たちと顔も合わせなかった。母親を食い殺した子だといって子供のそばにも行こうとしなかった。

ソリと名づけられた子供は冷たい父親の下で寂しく成長した。幸いなことに幼いソリをとても可愛がる兄がいた。パク・ピョンの一人息子ソギは多情多感な少年で三つ下の妹にとっても優しかった。兄は寂しいソリがこの世で頼ることができる唯一の保護者であり守護神だった。

歳月が流れた。ソリは十五歳の夢多き思春期の少女になった。ある日、パク・ピョンは兄妹を呼んで前に座らせて悔恨の涙を流した。今まで自分だけ悲しみにくれてソリを虐待した過ちを悔い、父親代わりに妹の面倒を見てくれた息子のソギに感謝した。そして箪笥の中から白い狐の襟巻きを取り出し、ソリに手渡しながら母親の形見だから大切にするよう重ねて言った。

部屋に戻ったソリは狐の襟巻きを胸に抱いて大声をあげて泣いた。ソギが部屋に入っていってなだめたが、彼女は泣きやむ気配がなかった。ソギは母親に対する恋しさが積もりに積もって一度に爆発したのだろうと思い、静かに部屋から出てきた。泣き続けた挙句倒れてしまったソリはまる三日間床に臥した。高熱にうなされながら時々意識が戻ると、体全体をブルブル震わせ歯軋りをした。まるで怨恨で充たされた悪鬼が彼女に取り憑いたような様子だった。

申 日東（ｼﾝ ｲﾙﾄﾝ）の履歴（歴史とイデオロギーの狭間で生きた）（２１）

申 日 東（元章）民族学校教職歴２２年

この自分史は日東自らがアルツハイマーと宣告された後、殆ど盲目（0.02）で薄れ行く記憶を辿りつつ、パソコンの音声を頼りに書き下ろした文です。書き漏らしたことも多く、また重複した部分も沢山ありますが、短編集を読む感じで読んで下さい。

日東は、それから六年間、東神戸で教鞭をとりました。
その後、配置転換となり、四月には垂水の朝鮮中高級学校の教員として赴任しました。
専門分野である生物、化学、物理、数学（理数科）を担当しました。
日東は、難しいと言われる理数科の授業でも、解るまで丁寧に教えました。一つのことを教えるのに、実験や解剖授業は分かりやすく教えましたので、楽しい授業では生徒達が笑い、どよめきの歓声をあげるので、隣のクラスからクレームがくるくらいでした。
例えば、科学で水を教える時、化学記号のＨ２Ｏは水素原子が二つで酸素原子が一つで手を結びあい安定した形の水になっている。この水を電気で水素と酸素に分離し水素のみを貯えて置いて、自動車の燃料に使うと、自動車は湯気をはきながら力強く走るんだよ。この水素自動車はいくら走っても二酸化炭素のような有害物質は出さず、クリーンな燃料になるんだよ。それは全世界のどの学者も知っているが、いまだに水素自動車は走っていません。なんででしょう？といった授業でした。
それは水を分解するのに大量の電気が必要なので、コストがガソリンよりも高くっくので、水素自動車は走っていません。しかし、化学には触媒というものが有ります。水を分解する触媒を見つければ、その人はノーベル賞、世界一の金持ちになれます。〇〇君、君がその触媒を発見しなさい。ノーベル賞まちがいなしです、と……。
生物の時間は野山に出て植物の観察をし、動物は出来る限り解剖をして観察をさせました。
例えば、心臓を教えるときは、近くのかしわ屋さんで前日に鳥の心臓（こころ）を人数分買ってきて、観察させました。ストローを大静脈の血管に刺し、大動脈、肺動脈、肺静脈を塞いで息を吹き込むと、壁の薄い心房が大きく膨らみます。この状態にして心室の分厚い壁、心筋の力強い圧力で全身に血液が循環していること、心臓は生まれて死ぬまで一時も休まず鼓動している事に感謝し、あなたたちは立派になるべきです、と教えました。

その他、蛙や魚などの観察や解剖や実験をしました。生徒たちは、瞳をきらきらさせながら授業に集中してくれました。
その結果として、授業のテストは常に八〇パーセント以上の満点を出しました。先生方も驚いて授業を参観しに来ました。
その頃は、朝鮮総連の全盛期で、在日の子弟が日本学校から朝鮮学校に編入してくる生徒が増え、その編入学級も担当させられました。その生徒達を促成教術で一週間でハングルの読み書きをマスターさせ、一学期で朝鮮語の会話が出来るようにして、一般教室に送り出す教え方も編み出しました。・・・・・・　一冊にまとめましたのでお読みください。
教員としての全盛期だったと思います。日東の教授法は何回忘れても、また思い出すコマーシャル方式でした。授業中に黒板に書いた文はノートに書き取らせず、その分プリントにして配り、家に帰ってノートに書き写す宿題として復習をさせて、後日プリントを回収し、授業中はもっぱら講義に集中させる、教授法でした。

雲水（くもみず）の行方や何処（いずく）なるらん　（52）
～韓(から)くに雲水の旅・慶尚南道・密陽・昌寧を出立、世界遺産・海印寺へ～2

FPU 兵庫 副会長
元臨済宗東福寺派 京都総本山東福寺 塔頭 即宗院　　曹 小 煥

伽耶山・海印寺を何としてでも訪問したいとの思いは、学生時代からの長年の願望であった。そこには歴史と、朝鮮文化に触れる書物の影響があった。大学での先輩である井上靖著『風濤（ふうとう・かぜとなみ）』モンゴル制圧下の高麗王朝時代の朝鮮半島の状況を描写した小説)を読んで、50 年の歳月が流れた。その旅は文化遺産と、朝鮮民族である「在日」の一人としてのアイデンティティ(自分探し)模索の重要な出発点でもあった。

２００７年の初夏の事である。７４才に達した旅の在日僧がひとり、母国の土地の歴史や地形にこだわって旅をしていた。行く先々のそこに住む人たちとのふれあいを大切にしつつ、野宿を重ねながら、此処、朝鮮三大巨刹の一つである高麗大蔵経を蔵する世界遺産の伽耶山・海印寺の山門前にやっとの思いをしてたどり着いた。はやくも葉桜のうらに夕陽の陰（かげ）りが来ていた。日が暮れてから山内（寺内）の境内をうろうろと散策をするわけにはゆかないので山門から１㎞ほど奥まった所にある本堂（大雄殿）と大蔵経を保存しているという９３棟も在るといわれる諸伽藍に向かってまず、深々と頭を下げ、両手を合わせて合掌をしてからおもむろに五体投地の拝礼を行った。思えば五体投地の拝礼をするのは実に兵庫県西部の高校を卒えて母の許を１８才の折に離れてから５６年ぶりのことであった。京都五山の一つに数えられる巨大禅寺である東福禅寺に入門して３年間、一日も休むことなく大学の文学部に通学しながら早朝の３時に他の修行僧よりも一足先に起床して、鐘楼堂で仏の声とされる鐘の声（音）を出すために堂木をひと突きしては五体投地の拝礼を行っていたことを、はからずもその当時の記憶を蘇らせたのであった。そればかりではなかった。「身体八膚これ父母に受く」の孝経の一節と両親が自分を此の世に生んで呉れた感謝の念が含まれていたのであった。父の故郷も母の故郷も、海印寺と同じ伽耶連山系であり、ちょうど隣村といった関係であった。それ故に彼の行う五体投地の礼拝には余人には知られない格別の意味が秘められていた。その行為はまた、亡国の民として異国の日本に流れゆき、その異国で再び故郷の土を踏むことなく生涯を終えた父母に対しての哀惜の念の表れとでも言えた。せめてものの父母に対しての「孝道」の一端でもあった。30 回の五体投地の礼拝を終了して彼はわずかばかりの旅の荷を整えると海印寺の山門をおもむろに離れにかかった。はやすでに日はとっぷりと暮れていた。10 人ばかりの参詣人が彼の五体投地の仕ぐさをずっと眺めていたらしく彼に話しかけてきた。山門に取り付けられている外灯の明かりが東の空から上って来た月の明るさと相和して人々の気持ちをゆったりと落ち着かせてくれていた。「スニム……これからどちらへ行かれるのですか、私たちはバスで釜山に帰るのですが若し良ければご一緒しませんか」とグループのリーダーらしき男性が彼に話しかけてきたので「実はタ暮れに着いたので未だ見学していません。明朝早く改めて参詣しようと思っていますので残念ですがご一緒は出来ません」と返事をして、リーダーらしき男の申し出を心から感謝しながら辞退した。「この国のスニムでスないようですうがどちらからですか」の質問には「実は２週間前に日本から釜山に着いて父母の故郷を訪ね終えたところです」と答えた。「実はひとつおたずねしたいと思っていることがありまして」と聞くので「どうぞ、なんなりと」と笑顔で答えると「私たちも五体投地の礼は何となくするのですが、どんな意味があるのでしょうか」であった。彼は東福寺時代の頃の事を思い出しながら丁寧に自分自身に言って聞かせるが如く彼らに分かりやすく語った。「五体投地とは身体の五つの部分で、最高の敬意を表す礼法のことです。頭、両手、両足を地に着ける行為で、孝行の情を表すものです。情とは父母への最高の心の意志を行動で示すものです」と説いた。やがて彼らはひとりずつ在日僧と握手を交わすとバスに乗り込んだ。その内の数人が「スニム、これはわずかですが民泊にでもお泊りになる足しにしてください」と僧に喜拾を行い、釜山へと去って行った。彼はひとりになると、海印寺の裏側にある古道を満月の月明かりに照らされて、伽耶山（標高 1430m）の登山口から山中に分け入った。今宵の一夜の宿を得るために公園の東屋をさがす為であった。

（つづく）

「愛は地球を救わない」？

京都大学名誉教授・ＦＰＵ京都会長　渡辺 久義

昨日の新聞の広告欄に「愛は地球を救わない」という本が出ていた。まことに馬鹿げたお願いで申し訳ないが、どなたか、買って読んで、内容を教えていただけないだろうか？　私は、落語家が客からお題を頂戴して話を作るように、このお題だけを頂戴して論ずることにする。確かに、地球は、我々が考えるような、自己満足的な、中途半端な愛では救われない。少なくとも、愛とは何かを真剣に考えたことのないような者の愛によって、地球が救われるとは思えない。我々は、この欠陥のある文化によって教育されているために、愛といえば、こそばゆいような感じのする、あの愛しか知らない。もっとレベルを上げても、我々は、憎しみはよく知っており、マザー・テレサが愛の対概念だという、孤独や放置の恐ろしさは想像できるが、それに対立する、本来の愛とはどのようなものかを、知らないでいる（もちろん私を含めて！）。というより、考える必要のないことだと思っている。

そこで、人間は、進化すべきものとして生まれてきたと仮定しよう。そもそも同じ意識レベルを繰り返すことに、意味があるとは考えられないから、そう考えるのがむしろ当然であろう。そして、集団的な意識の飛躍的向上が、遠からず、宿命的に予定されていると考えてみよう。その場合、人類全体に対する、一種の資格試験のようなものがあると考えられないだろうか？　これもあって当然だろう。この飛躍の本質は「量子飛躍」（非連続的飛躍）だという人もいるが、それにしても、我々は動物ではないのだから、意識的な準備は当然、必要であろう。（実はこの準備こそ、人類の歴史だったと考えてよい。）

そしてその資格試験には、「愛」というものが、最も大きな課題になると考えるべき、十分な理由がある。少なくとも、AI（人工知能）を発達させて、人間を廃止してしまおうというような、科学の発達ではありえない。我々は人類歴史上、特別な時代に生きている。その表れの一つとして、この試験課題が急速に意識されてきた。意識せざるをえなくなってきた。我々の世界は今、どう見てもキチガイじみた様相を示している。これを否定する人はいないだろう。我々のサイトを通覧していただくだけで、納得できるはずだ。本来、人間のやるはずのないことが、堂々と行われ、それが日を追ってエスカレートしている。

ペドフィリアの蔓延という現象は、その最も深刻だが、つながった集団狂気の一つにすぎない。ひどい例は――信じられないが――犠牲者が幼児どころか、乳児であることも少なくない。これは悪霊現象としか考えられない（人間が責任を免れるわけではない）。国家としては、イギリスやオランダは、ペドフィリアを禁止するより許容する方向に向かっている――インド（このために死刑復活）、パキスタン（公開処刑）、フィリピンなどは、逆に、極刑採用に向かっている。このキチガイ沙汰も、自然に考えられることではない。何者かが、愛の裏返しのあり方を、同じ性行為を通じて、我々に強制して見せつけようとしている。我々の中途半端な“愛”は、このような愛の裏返し（サタン行為）につながる可能性があるぞという、警告を発している。と、そのように解釈しなければならない。我々の愛が本物の愛でないかぎり――「愛は地球を救わない」。

我々は、悪の極限の形を見せつけられるとことによって、本当の愛とは何かを考える、きっかけにしなければならない。ただ怒り狂う、サタンを憎む、あるいは目をそらす、というだけでは我々は成長できない。受動的でなく能動的に、逃避的でなく自己実現的に、この苦難の時代を乗り越えねばならない。死ぬかもしれない。死んでもよいではないか。死んでも、我々は小さな自分に囚われて死んだのではない、門を開こうとして死んだのである。

宗教を持ち出したくはないが、我々は宗教的に間違っていたのではないか、という思いが、この転換期には起こってくる。少なくとも組織化された宗教には、ある共通の弊害がある。いつか、イルミナティの逆説の哲学者Hidden Handの哲学について触れたことだが、どの宗教でも、エデンの園の神話に明らかなように、悪に触れないように、悪を遮断して「箱入り娘」のように生きることが、是とされる。したがって、どこの宗教でも、「ここにつながっていれば大丈夫」という自己満足感を生み出している。これは確かに、ある程度まで人を満足させるが、そこで育まれる「愛」は、規模の小さいものではないだろうか？　他宗を排除していないと言っても本質は変わらない。それはサタンを含まないからである。サタンにはサタンの存在理由があって存在している。本当に地球を救う愛とは、我々の小さな世界の愛を延長したものでなく、我々の世界の存立の原理を変えてしまうような、規模の大きな愛、神の愛に近い愛なのではないだろうか？

兄弟姉妹

日本家系研究学会　与那嶺東雲

日本人の家系を調べれば、はるか神々の時代まで遡ることができます。
しかし、この神々の系図を含め、古代史は多くの謎に満ちています。
古代の民族名は大体その民族の信仰する神の名から発生するものです。
倭という字はあくまで中国の史書などに由来するものでワという音の当て字です。
倭国ではワ＝神の名であったことはまず間違いありません。
ワという神は旅する神で、神輿のように担がれて移動し、移動する人々はそれを担いでワッショイ・ワッショイと叫びながら行進したようです。
ワは神、ショイは背負うという掛け声。ワ背負う(ワッショイ)です。
古代に神を担いで移動した民族には有名なユダヤ人の風習があります。
神輿を幕屋という表現をするのですが、よく似ているのは神輿の上には
必ず鳥が鎮座しており、幕屋の上にはケルビムという鳥の翼があります。
この鳥は朝鮮半島から日本列島にかけての共通分母となるものです。
日本では鳥居のない村はなく、朝鮮半島では『後漢書』（東夷伝・馬韓）に、「蘇塗を立て、大木を建て以て鈴鼓（鈴や鼓）を懸け、鬼神に事（つか）う」とあり鳥杆を建てて神を呼のが習わしで、鳥は神を運ぶ神使であり、鳥杆は神の依り代であったのです。
倭族は自分等を天孫子と自称しており、太陽に儀される天照大神を先祖として信奉して参りました。ゆえにワは本来は太陽＝輪の形をしたものという次元までは解釈可能です。輪（ワ）は日本語です。
その神事を執り行うのは基本的に女性でした。その女性達をオモと呼び朝鮮半島ではオモが母親を示すようになります。
日本でも、もっとも重要な家屋を母屋（オモヤ）と呼び、正面入り口を表手（オモテ＝母手）といい、皇室では現在でもお母様をオモーさまと呼ぶ習わしがあるのははるかな神話時代からの続きです。
琉球語では母はアンマーといい、朝鮮語では今でもオンマーで通じます。
オンマはオンモでありオモと同じ意味です。
即ち、オモは朝鮮半島と日本列島まで繋がる言語として共通なのです。
また、重要な人々を重（オモ）なる人々といいますが、やはりオモが語源です。
母が単なる母ではなく、神を祭る中心であり、神事を営むのは古代の倭では女性であり、今でも琉球地方では全部女性です。
重々(オモオモ)しく敬われる人々でした。
参考に述べておきますが、ユダヤ教の神ヤーウェは倭語ですとヤー（親）ウェ（ワ＝神）となり親神という意味にも取れます。
因みに親の語源はオヤーであり、偉大な母親と言う意味です。
古代の高句麗語でも母はヤジと言いました。
ジは尊敬語で父親のアボジ、日本語のオヤジ、妻であるトジという言葉が今日まで伝わってきました。
日本の神道でも女性が亡くなると〇〇刀自（トジ）という神号が与えられます。
これほど共通した民族は世界どこを探しても他には存在せず、同じ親から出た兄弟姉妹であることは間違いありません。
それは、北と南も同じです。全て超えて過去を許し合ってウリヌンハナダと
言える日を待ち望みます。

「神戸と韓国との過去」

兵庫支部　支部長　青木 新次

韓国と日本の関係で誰でも最初に思いつくのが豊臣秀吉の当時の朝鮮への出兵ですが、関ヶ原の戦いで徳川家康が政権を握って、朝鮮への出兵を謝罪し、当時の日本と朝鮮に国交が回復されて、その「信（まこと）」の証として送られたのが朝鮮通信使です。

朝鮮通信使は、徳川政権下に 12 回送られ、最後の 12 回目は、対馬止まりでしたが、江戸に行く途中に 10 回も現在の兵庫区の兵庫津に宿泊したとされています。国賓級の扱いで入念な準備をして迎えたようです。

兵庫津の近くには、当時兵庫城があり，平清盛が福原京を開いたほどに良好な港であったようです。現在では、兵庫津のなごりは残っていませんが、唯一兵庫区の中央市場の近くに兵庫城跡の碑が残っているだけです。

次に、日本と韓国の歴史の中で、今も鮮明に記憶に残っているのが、日本の徳川政権が倒れ、近代化に移行する日本と共に近代化を計ろうとする韓国が日本に留学生を送り、日本の助けを受けながら近代化を進めつつある時代。東アジアでは、日露戦争が起きて、日本が勝ち、その講和条約の末に日本が韓国を統治するように成っていったのですが、当初は、日本に留学した人々が官僚の主要な位置について、韓国の近代化を進めていったのが日韓併合だったようです。

韓国の近代化を目指していく中で、日本の政治が富国強兵の流れに、軍部が政権中心に入って、近代化を目指していた韓国への政策が段々植民地としての政策に変わっていったのではないでしょうか。

日本語の強要、創氏改名等、韓国の近代化とは、関係のない方向へと政策がとられ、韓国の方の自尊心を傷つけ屈辱的な政策が取られていくようになったのも悲しい事実としてあります。その上、韓国国内または日本に連れて来られ、道路整備、飛行場整備、トンネル建設等、危険できつい事柄を担当されながら、忍の一字で超えてこられた辛い時代もありました。

その時代の象徴とも云うべき建物が、以前ソウルにありました。旧国立中央博物館であり、日本統治時代、その中心となっていた韓国総督府がそれです。その総督府の初代に就任したのが初代兵庫県知事を務めた伊藤博文です。

伊藤博文は、韓国と東京を何度も行き来しながら、その責務をこなしていましたが、韓国から東京に向かう際に、必ず神戸港で下船して、現在の大倉山公園の中にあった大倉喜八郎の別荘に立ち寄ったようです。

大倉山公園の神戸市内が一望できる位置に伊藤博文の銅像の台座だけが残っています。銅像自体は、太平洋戦争の金属不足で撤去されたようです。

戦時下の神戸には、多くの韓国の方たちが生活のために故郷を捨ててこられ、様々な労働に従事させられました。主な従事先に 1.港湾の荷役作業。2.市内の軍需工場での作業、3.地下豪の建設作業。そのような危険できつい仕事に従事して、労働災害でケガをされたり、亡くなった方も少なくありません。また、昭和 20 年に入ると、空襲爆撃でも多くの韓国の方が、故郷から遠く離れた見知らぬ土地で身元も分からない無縁仏として葬られています。

そのような、多く無縁仏として弔っているお寺の一つに生田川沿いにある東福寺というお寺があります。

このような悲しい過去を踏まえて、これからは韓国と日本が互いに為に生きる生き方を通して、一つになれるように努力していかなければならないと思います。

錦山 文潤國先生の詩

敬次白雲菴韻　　경차백운암운

松納緇衫靈界尋　　송납치삼영계심
白雲菴壁半空臨　　백운암벽반공림
玉階遍満稘花發　　옥계편만기화발
碧殿時聞谷鳥吟　　벽전시문곡조음
誦経戸外潛龍出　　송경호외잠룡출
説法筵前細草深　　설법연전세초심
長在沙門惟念佛　　장재사문유념불
大悲塵世恐沈淪　　대비진세공침륜

백운암을 읊음

고승이 검은 장삼 걸치고 신령한 곳에 찾아들 제
백운암의 바람벽이 높이 하늘 중간에 떠있는 듯
옥돌을 깔은 층계에는 온통 기화요초가 자라 덮였고
푸른 숲 불당까지 때때로 골짜기 새소리가 들려 오네
독경소리 문 밖으로 들려 나오자 물에 잠겼던 용마저 뛰어 나오고
불법을 강설하는 자리 앞에는 다소곳이 작은 풀들이 우거져 있네
평생을 사문에 살면서 오직 염불 독경하는 까닭은
자비 불심으로 티끌 세상 침몰할까 걱정을 해서니라.

小寺にて白雲を敬う

僧が黒衣にて　　神霊界を尋ね
白雲の風壁　　空中に高く臨む
草花の満ちて　　階層の遍（あたり）を覆い
碧（あお）き仏堂に　　時折り谷鳥の声を聞く
経を読む声は　　戸外に潜（ひそ）む龍を出ず
法を説かば　　門前に草々深し
僧としての生涯を説かば　　ただ惟（これ）念仏を唱う
大慈大悲の仏心は　　俗世に潜むを恐れるが故に

「海洋時代の為に」

初めて太平洋を横断した日本の船は？

ＦＰＵ兵庫 渉外部長　金 豊 鎬

太平洋を初めて横断した日本の船というと、幕末に勝海舟が艦長として乗った「咸臨丸」と思っている人が多いかもしれない。しかし、事実はそうではなく、「咸臨丸」は、太平洋を横断した３番目の日本の船である。

日本の船で初めて太平洋を渡ったのは、江戸時代初期の「サン・ブエナ・ベンドゥーラ」である。これは、徳川家康が日本に漂着したイギリス人航海士ウィリアム・アダムズに命じて作らせた船である。アダムズは三浦按針という日本名をもつ家康の外交顧問。アダムズは造船技術をもち、１６０７年、いまの静岡県伊東市にドックをつくり、１２０トンの船を完成させた。

１６１０年、スペイン人で前フィリピン総督だったロドリゴ・デ・ビベロらの船が、嵐に巻き込まれ、房総に漂着した。彼らスペイン人をメキシコまで帰らせるために、家康はアダムズ建造の大型船を貸し与えた。スペイン人らは、これを「サン・ブエナ・ベンドゥーラ」と名付け、同年に出帆した。日本人は乗っていなかったものの、これが太平洋を渡った最初の日本製の船となったのだ。

その後、１６１４年には、日本製の船に乗って、日本人が太平洋を渡っている。船は、仙台藩で建造された「サン・ファン・バウティスタ」。仙台藩主・伊達政宗の命で建造されたスペイン式の帆船である。政宗は家臣の支倉常長らをスペイン、ローマに派遣、貿易交渉などを試みた。これに日本に来航しながらも、船の破損で本国へ帰れなくなっていたスペインの司令官ビスカイノも便乗。彼らは、１６１３年にいまの宮城県石巻市の月の浦を出帆し、翌年にメキシコのアカプルコに到達した。「サン・ファン・バウティスタ」は、寸法図が残っていたおかげで、１９９３年になって生誕の地・石巻市で復元されている。

『千字文』と韓国語〔35-1〕曺 小 煥

化	被	草	木
될 화	입을 피	풀 초	나무 목
か・け	ひ	そう	もく
かわる	おおう・こうむる	くさ	き

か　ひ　そう　もく＝化（天子の徳によって感化されること）は、くさきにあまねくおよぶ、と判読する。意・訳は徳化はあまねく草木にこうむらしむ（およぶ）である。

化＝か、王化（天子の徳によって感化されること）、かわる、ばける。
被＝ひ、あまねくおよぶこと、こうむる、かぶる、うける。
草＝そう、くさ、はじめ、いやし、田舎じみている。
木＝もく、ぼく、き、こ、五行の一つ、七曜の一つ。

∴『千字文』四方八方（よもやま）話（79）「化被」のことを、恩師の小川環樹教授（京都大学・文学部）は 1953 年（65 年前）に、「草木にまで慈（いつく）しみ、王化（天子の徳）を被（こうむらしむ）」と教壇で述べられたあと「支配層の実態（中国の皇帝と日本の天皇制）がこの文章の中に塗りこめられている。そのことを植民地化された朝鮮半島の人々は忘れてはならない」といみじくも語られたが今、私にとって、昨日の如く、新鮮に思い出されてならない。そして現今に至るまで「天皇の植民地政治」と「草木が亡国の民」を意味していることを忘れないでいるのである。それが私の民族の原点で在り、私の青春の原点でもあったと言える。『千字文』は四字熟語が２５０首で成り立っているが、〔３５首目〕の「化被草木」が私の肩に学生時代からずしりと重くのしかかっているのである。『書経』に王が国を治め、そこに正しい道があれば、草や木のようなちっぽけなものであっても、みな（人々は）潤（うるお）い幸せになるとある。

活動内容

１月１１日　定例役員会
１月１２日　韓国語教室
１月２６日　韓国語教室

行事案内

２月０２日　韓国語教室
２月０８日　定例役員会
２月０９日　韓国語教室
２月１０日　平和統一原理 ONE DAY ｾﾐﾅｰ
２月２０日～23 日
　　平和統一平昌オリンピックツアー

編集後記

■本紙である『月刊・平和統一 NEWS』は多様性を持った月刊誌です。読者には様々な人々が存在します。『在日』と呼ばれながら思想の異なった韓国民団系と朝鮮総連系と、そのどちらでもない一般的在日韓国。朝鮮人です。また、その中にある１世２世と、３世４世との風俗、習慣の相違です。そこへ多文化共生への意志を持つ良識ある日本人と、国際性に目覚め海を越えて渡って来た存在の韓国婦人たちの姿があります。本紙に連載されている尾道氏の『韓国民話』と、前、高麗大学総長、洪先生の『韓国人』は共に断絶が深まりかねない日本と韓（朝鮮）半島の障壁を打ち破る良い文学の意義が問われる読み物です。渡辺京都大学名誉教授の特異性のある随筆は未来を見据え警鐘を鳴らしています。日本家系研究家の与那嶺先生は精力的に半島と列島は血を分けた兄弟であることを力強く説かれた文を掲載し、多くの教訓を私たちに指示してくれています。これらの連載も「共に生きる」多様性を認め合いながらその人らしく生きていくことを描いています。民族学校の元校長、申先生と在日で京都東福寺雲水僧のドキュメンタリー作品は自己の朝鮮民族のルーツをたどり、恥も外聞も度外視しての「在日とは？」を追求した作品です。それは自分の衣服を一枚一枚、はがしてゆくような作業でもあるとある日、申先生が述懐していたのを聞きました。本紙『月刊・平和統一 NEWS』は各氏のさりげない設定に、多文化共生への意志が読み取れます。まさに未来を見据えた良い作品集です。良いものを読めば、新しい考えや、私たちをつなぐ人間的な糸口や視点が見つかり、各分野で教養が深まるのではないかと思われます。本紙の存在の意義が本紙にはいっぱい詰まっていると言えます。　（曺）

■今年の冬は例年になく、12 月から平均気温及び平均気温以下の日が続いています。暖かい日がほとんどありません。まさに現在の世界情勢そのままです。文総裁の願われる、為に生きる精神はどこに定着するのでしょうか。為に生きる精神が定着した家庭が、氏族・民族・国家へと広がればその国にはすぐに平和が訪れるでしょう。理想家庭を実現する為に努力していきましょう。　（樹）

機関紙　月刊『平和統一 NEWS』
＜編集委員会＞
委 員 長　文 聖 純
副委員長　曺 小 煥
編集局長　福田秀樹
編集委員　韓 靜 旼
編集委員　金 豊 鎬
編集委員　廣瀬純子

COREA

投稿記事募集
交流の広場への投稿記事を
募集しています。

FAX.078-367-4323
E-mail: hyougo-2017@fpuhg.main.jp